

飼料高騰に打ち勝つ肉牛経営

- 創意工夫による低コスト生産 -

青森県三戸郡三戸町

野中耕進

1 出品財

出品区分：放牧部門（経営内放牧）
草種・品種：オーチャードグラス主体草地
利用形態：時間制限放牧
出品圃場面積：1300a（野草地含む）



2 地域の概要

三戸町は、青森県三戸郡の南端、岩手県と秋田県の境に位置し、古くから城下町として栄えた町であり人口は約12,500人の中山間地域です。年平均気温は10.3℃、年間降水量は1,157mmであり、東北地方太平洋側特有の「ヤマセ」の影響が少なく、比較的温暖な気候となっています。

耕地面積は約2,800haと少なく、主要な作物は水稲、りんごを始めとした果樹、にんにく、葉たばこ、畜産などです。特に、葉たばこ、にんにくは全国有数の作付面積となっており、これらの作物と水稲・果樹・畜産を組み合わせた典型的な複合経営地帯です。

3 経営の概要

(1) 経営形態：肉用牛（黒毛和牛繁殖）＋水稲＋にんにく

(2) 家族及び労働力

区分	年齢	主な作業内容	農業従事日数
経営主	55	飼養管理、草地管理、各種機械作業	365
妻	55	子牛飼養管理、にんにく	180
父	75	飼養管理全般	185
母	76		0

(3) 家畜飼養頭数（頭）

成雌牛	育成牛	子牛	合計
40	3	22	65

(4) 経営面積(a)

採草地	放牧地	サイレージ用		水稲	にんにく	合計
		うち野草地	とうもろこし			
300	1,300	1,000	300	400	40	2,340

(5) 主な施設

区 分	内 容
畜 舎	木造 1 棟 60 坪 (旧乳牛舎) パイプハウス牛舎 2 棟各 55 坪
施 設	堆肥舎 44 坪 1 棟、倉庫 1 棟 80 坪、籾殻(敷料)庫 1 棟 24 坪 電気牧柵、牧柵
機 械	トラクター 3 台 (80pS、50pS、23pS)、モア-、テッター、レーキ各 1 台 コーンハーベスタ、コーンプランター、プラウ、ロータリー各 1 台 マニュアルプレッダ、ショベルローダー各 1 台 など

(6) 経営・技術主要諸元

区 分	実 績
平均分娩間隔	12.3 か月
受胎に要した種付け回数	1.3 回
子牛販売平均単価	560 千円
成雌牛 1 頭当り年間所得	228 千円
所得率	54.5 %
飼料自給率 (TDN)	39.7 %
飼料作物 TDN1kg 当り生産費	26.7 円

4 経営の特徴

(1) 裏山利用による林間放牧で低コスト・省力管理

「牛は外で飼う」ことを基本に、畜舎に隣接する林地 1,300 a に 300a の草地を造成して 5～10 月の間、毎日放牧している。牧区は、管理作業の面から 1 牧区制とし、分娩後 2～3 か月後の親子を、朝～夕まで放牧している。また、放牧のできない冬期間においても、毎日パドックで運動させていることから繁殖成績が良く、平均分娩間隔は 12.3 か月、平均種付け回数は 1.3 回となっている。

脱柵防止のため、パドックに電気牧柵を配置しており、その他林間放牧地についても平成 19 年から本年度にかけて、全て電気牧柵を導入することとしている。

また、牛舎はハウス用パイプを利用して、自力施工 (一部は業者委託) により建設するなど、徹底したコスト低減に努めている。

(2) サイレージ用とうもろこしの利用

以前に酪農を営んでいたこともあり、肉用牛経営としては地域でいち早くサイレージ用とうもろこしの作付けに取り組み、飼料費の低減を図っている。

サイロは、畜舎間等の空いたスペースを利用したトレンチサイロとして利用し、施設に係るコストを可能な限り抑制している。

(3) 優良牛の生産

後継牛は、血統・育種価の他、連産能力や哺乳能力を基準に選定し自家保留している。生産子牛は県畜産共進会においてグランドチャンピオン賞を受賞するなど、高い評価を得ている。

(4) 地域への貢献

地元 J A の肉牛部会長を務め、会員の技術向上のための研修会等を企画するなど、地域肉用牛振興に努力している。また、地域の和牛改良組合の組合員として、繁殖基礎雌牛の保留や指

定交配への協力など、改良事業へも積極的に参加している。

(5) 家族労働力による複合経営

肉用牛経営、粗飼料生産に水稲、にんにくというそれぞれの繁忙期(5~10月)が異なる作物を導入し、さらに5月~10月に放牧を利用して飼養管理に要する労働力を軽減することにより、年間を通じて家族労働力による無理のない複合経営を営んでいる。

また、堆肥についてはサイレージ用とうもろこしのほか、にんにく畑や水稲へ利用するなどして経営内で循環し、有効に利用している。

5 今後の目指す方向

(1) 子牛生産費の低減

牛舎が3棟に分かれているほか施設の構造上、労働時間の短縮が難しい部分もあるが、記帳管理や無駄な労働時間の短縮に努めて作業効率の向上を図る。またサイレージ用とうもろこしの栽培拡大等により、飼料費を節減するなどして、最終的には子牛1頭当り生産費を200千円、当面は250千円を目標としている。

(2) 粗飼料生産の拡大

圃場の酸性化などにより生産性が低下していることから、適正な土壌管理に努めるなどして、生産性を高めていくとともに、作付面積を増加し、可能な限り自給粗飼料の生産に努めていく。

(3) 技術力の向上

1年1産を基本として、出荷子牛の発育を去勢は8か月令で300kg、雌については9か月令で280kgを確保できるよう、交配管理、哺育育成技術を高めていく。

(4) 繁殖雌牛50頭規模へ

最終的には繁殖雌牛50頭規模の経営を目指し、家族労働力で無理することなく、そして後継者へと経営移譲し、親子3代で牛飼いを続けていくことが目標である。

受賞者のことば



青森県三戸郡三戸町
野中 耕進

この度、第12回全国草地畜産コンクールにおいて栄えある賞をいただき、大変嬉しく、厚くお礼申し上げます。今回のコンクールへの出品に当たっては、県草地畜産協会を始め、関係機関の方々に大変お世話になりました。関係者の皆様には、厚くお礼申し上げるとともに、今後とも引き続きよろしく願いいたします。

我が家の畜産経営は昭和初期、祖父の代の軍馬生産に始まります。昭和35年には、乳用牛15頭規模で放牧酪農を営んでいました。平成元年に1頭の黒毛和牛を導入したのを契機として、平成5年には全面的に肉用牛へと転換しました。その後、平成6年、7年とハウス用鉄パイプを利用したほとんど自力による牛舎を増設しました。父の代より「牛は外で飼うのが基本」というのが我が家のモットーであり、牛舎は雨雪、風がしのげる程度で十分であると考え、できるだけ低コストでの建設を目指しました。牛舎を増設してからは、無理をしないで緩やかに増頭し、平成12年には繁殖雌牛35頭、そして現在では40頭規模まで増頭することができました。

裏山を利用した林間放牧は酪農時代から取り組んでおり、それが繁殖成績・健康にとっても良いと認識しておりました。肉用牛経営へと転換した際も、躊躇することなく放牧へ取組むこととしました。また放牧は、水稻・にんにくの作業競合を避け、規模を拡大していくためにも必要なこととなりました。

とは言え、肉用牛経営への全面転換は当初は家族に大きな負担であったと思います。今回の受賞に際してこれまでを振り返った時に、あらためて家族へ感謝する次第です。

今後の私の目標は、子牛生産費を低減し、繁殖雌牛50頭規模へと拡大していくことです。家族労働力で、他作物も現在と同程度と考えた場合、無理なく、しかも所得を向上させることができるのが、この規模であると考えています。

配合飼料が高騰している今日、できるだけサイレージ用とうもろこしの栽培を拡大し飼料自給率向上に努めるとともに経営管理の工夫により子牛生産費を縮減し、家族労働力による「コンパクトでゆとりのある」経営を続けて行きたいと思っています。

幸い、後継者は現在、肉用牛関係の仕事をしており、人工授精や受精卵移植の作業を手伝ってくれています。そう遠くない将来、私も後継者に経営移譲する日が来ることを楽しみにしながら、今回の受賞を励みとして、今後とも家族とともに肉用牛経営に取り組んで参りたいと思います。